View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

本学医療保育科病児保育コース学生の学びに関する研究Ⅰ；「医療」に対するイメージの変化からみる実習および学内指導の効果の検討

神垣　彬子，入江　慶太，笹川　拓也，宮津　澄江

A Study of Acquisition of Knowledge in Nursing Childcare Students（Ⅰ）
—Examination of the Effects of the Training and Lecture through the Change of the Image of "Medical Care"

Akiko KAMIGAKI, Keita IRIE, Takuya SASAGAWA and Sumie MIYAZU

キーワード：医療保育，病棟保育，小児病棟実習指導

概　　要

本研究では，学生の「医療」に対するイメージの変化を通して，実習および学内指導の効果を検討した．その結果，実習前に比べて実習後のほうが学生の持つ「医療」のイメージに深まりがみられ，内容もより専門的で具体的な内容になることが明らかとなった．また，医療機関でサービスを提供する側の視点を獲得することでみえてくる，医療現場の実際の様子にも言及できるようになることが明らかとなった．このことから，病棟保育実習ならびに病児保育実習を経験することで，学生は，職業意識を高めることや学内での学習を深めることができる可能性が示唆された．また，本学医療保育科の学生は，病棟保育ならびに病児保育に携わる上で必要とされる専門的で具体的な医療の知識を，他の保育者養成校の学生よりも多く獲得することができていることが明らかとなった．このことから，医療保育科独自のカリキュラムは医療保育士を養成するという目標を達成している可能性が示唆された．

1．問題と目的

医療保育とは，通常の保育所や幼稚園における保育とは異なり，医療と密接に関わるフィールドである小児病棟や外来，病児・病後児施設，各種障害児施設における保育を総称したものである[1]．それらの施設において保育や療育を行う保育士を，総称して医療保育士と呼ぶ．本学医療保育科の病児保育コースでは，医療保育士の中でも特に，病棟において入院児への保育を行う病棟保育士と病中病後の子どもの保育を行う保育士の養成を目的としており，３年次の８月から10月の間に，全国各地の大学病院や子ども病院，小児保健医療センター，総合病院で10日間の病棟保育実習を，岡山県内の医院併設型病児保育施設で２日間の病児保育実習を行う[2]．

日本における最初の病棟保育士の導入は，昭和29（1959）年であったと考えられる[3-5]．当時，病棟保育士は病棟保母という名称で呼ばれており（1999年４月１日以降に保母から保育士へ名称変更），その業務内容は，子どもの遊ぶ環境を重んじるとともに病院における子どもの日常生活をより豊かにすることに重点が置かれていた[4]．この点については，現在の病棟保育士と同じといえる．しかし，当時の保育業務には現在のように診療報酬が加算されていなかったため，平成14（2002）年の診療報酬改訂において病棟保育士の加算が認められるまでは，非常に厳しい運営資金の中で保育業務を行っていた[4]．平成16（2004）年にようやく１日当たり100点の加算が認められることとなったが，それでもなお，その診療報酬の低さから保育士の雇用を躊躇したり，十分な数の保育士確保することができないでいたりする病院も多い．大野[3]は，病棟保育士は，全国の病院の10％の病棟にそれぞれ１名ないし数名が導入されている状況に過ぎない，としている．

病棟において十分な数の保育士を確保できないことに関しては，病棟保育を行うことができる保育士が少ないということもまた理由のひとつといえる．病棟保

（平成21年10月16日受理）
川崎医療短期大学　医療保育科
Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

表１　本学医療保育科で開講されている専門教育科目の中の医療系科目

１年次	２年次	３年次
小児医療入門	医療保育総論	発達障害児保育論
人体の構造と機能	病児保育論	小児心療医学
感染と防御	小児病学	医療保育カウンセリング論
	発達障害児の理解	発達障害児援助技法Ⅱ
	小児臨床心理学	小児救急処置法
	発達障害児援助技法Ⅰ	
	小児と薬	
	障害児(者)の生活と福祉	

川崎医療短期大学：2010大学案内，p.22，2009　より作成

育士として働くにあたっては，通常の保育の知識に加えて医療の知識を持っていることが必須である．よって，病棟保育士の育成も目標の一つである本学医療保育科では，独自のカリキュラム編成により，卒業時までに病棟保育士として働くために最低限必要と考えられる医療の知識を習得できるよう，専門教育科目の中で様々な医療系科目を開講している（表１）．しかし，これまでに，医療保育科では，学内の講義を通して学生が病棟保育ならびに病児保育に携わる上で必要な医療の知識を学生がどの程度理解しているかについて調べたことはない．学生の医療に関する知識の程度の実際を調べることは，今後の病棟保育実習ならびに病児保育実習の事前事後指導の内容の見直しはもちろん，本学医療保育科のカリキュラム編成や授業内容の再検討にとって非常に有益である．

そこで，本研究では，本学医療保育科の学生が「医療」の根本的な概念をどのように理解しているのかを調べるために，「医療」という言葉に対するイメージ調査を行った．学生の「医療」という言葉に対するイメージが，実習の前後でどのように変化するのかを調べることで，病棟保育実習ならびに病児保育実習の意義や学生の育ちを明らかにした（研究１）．さらに，本学医療保育科の学生の「医療」という言葉に対するイメージを，医療保育士の養成を目的としない一般的な保育者養成校の学生の同イメージと比較することで，研究１の結果が本学医療保育科独自のものであることを確認するとともにカリキュラムの効果を明らかにした（研究２）．

２．研　究　１

目　　的

本学医療保育科の学生の「医療」という言葉に対するイメージが，実習の前後でどのように変化するのかを調べた．

方　　法

調査時期　本学医療保育科３年生の病棟保育実習ならびに病児保育実習前の平成20年８月上旬と，両実習終了後の10月下旬に実施された．

調査参加者　本学医療保育科３年生のうち病児保育コースに所属する学生37名（女子学生35名，男子学生２名；８月上旬：平均年齢20.54歳,10月下旬：平均年齢20.65歳）．いずれの調査でも，アンケートの回収率は100％であり，有効回答率も100％であったので，分析対象者は37名であった．

調査手続き　いずれの調査でも，無記名のアンケートによる一斉調査を行った．また，調査参加者には，アンケート用紙への記入は任意であることと，アンケートの結果が成績や評価等に一切影響しないことを伝えた．

アンケートの構成　いずれの調査でも，「医療」という言葉に対するイメージを，自由記述で回答するよう求めた．

分析方法　本研究では，学生の学習状況の実態調査を目的としている．学生の自由記述回答の中からボトムアップ的に新しい概念やカテゴリを形成していくために，調査対象者の自由記述回答の中からキーワードを抜き出し，それらを分類化していく方法を用いた．

最初に，回答の中からキーワードを単語～２文節程度で抜き出した．参加者一人当たりから抜き出すキーワード数に制限はなく，他の参加者と重複するキーワードは，その回数を数えた．回答から抜き出したキーワードは，類似したものごとにグルーピングし，カテゴリ化した．キーワードは，１つにつき１枚のカードに記入された．別々の参加者から同じキーワードを抜出す場合は，該当するキーワードのカード枚数をカウントした．キーワードの記入されたカードをランダムに並べて内容を確認し，意味が近いと考えられるカードを集めてグループ化した．次に，各グループに集められたカードを総覧し，それらのカードに共通するテーマを１つ付けた．この作業を全てのグループに対して行い，下位カテゴリを構成した（第１段階）．その後，下位カテゴリに対して，第１段階と同様の作業を繰り返し，（第２段階），さらにもう一段階同様の作業を繰り返すことで，最終的なカテゴリを構成した（第３段階）．

以上の作業を，筆者ともう１名の実習担当者との計２名で行った．後日，最終的に抽出されたカテゴリの妥当性を検討するために，分析の第１段階～第３段階

に携わっていない医療の知識を有する別の実習担当者が再分類を行ったところ，ほぼ同様の分類結果が示された．なお，分類が一致しなかった項目に関しては，３者で協議の上で再分類を行った．

結　　果

第１段階では９つ，第２段階では６つ，第３段階では４つのカテゴリを抽出した．第３段階で抽出された４つのカテゴリのテーマは,「医療機関で働く職員像」,「医療現場の様子」,「世間一般での医療の捉え方」,「その他」であった．「医療機関で働く職員像」のカテゴリには，医療機関で働くということ，あるいは働いている人とはどういうことかという漠然としたイメージが含まれた．一例として,「厳格さ」が挙げられた．「医療現場の様子」のカテゴリには，医療を実際に行っている現場のスタッフの状況に対するイメージや広義の医療行為そのものに対する連想的なイメージが含まれた．一例として,「手術」や「チームで連携」などが挙げられた．「世間一般の医療の捉え方」のカテゴリには，世間の人々が医療機関や医療行為に抱くポジティブなイメージあるいはネガティブなイメージが含まれた．一例として,「心強さ」や「恐怖感」が挙げられた．「その他」のカテゴリには，いずれのカテゴリにも分類されないキーワードが含まれた．一例として,「医療保険」が挙げられた．各カテゴリに含まれたキーワード数ならびにカード枚数を表２に示す．

病棟保育実習ならびに病児保育実習前（以下，実習前）の調査結果，病棟保育実習ならびに病児保育実習後（以下，実習後）の調査結果ともに，各カテゴリに含まれるキーワード数およびカード枚数が均等ではないことを調べるためにx^2検定を行った．その結果，実習前の調査結果も実習後の調査結果も，キーワード数（学内：$x^2 = 7.82$，$p<.05$；学外：$x^2 = 18.55$，$p<.01$），カード枚数（学内：$x^2=81.36$，$p<.01$；学外：$x^2=38.56$，$p<.01$）ともに，検定値が各有意水準の値より大きかった．よって，いずれの調査結果においても，各カテゴリに含まれるキーワード数およびカード枚数が均等とはいえず，各カテゴリに含まれるキーワード数ならびにカード枚数に高低があることが明らかとなった（図１，２）．

全体的な結果として，実習前に比べて実習後のほうが「医療」という言葉に対するイメージの種類（キーワード数）が増加したが，イメージの数（カード枚数）自体は減少した．カテゴリ別の結果は以下に記す．

医療機関で働く職員像　実習前は，このカテゴリに含まれるカード枚数は26枚と，全体の約28％であったが，実習後は，このカテゴリに含まれるカード枚数は11枚に減少し，全体の約12％となった．このことから，実習を経験することで，医療機関で働く職員の就労状況や医療機関の職員になるための課程に関するイメージの数が減少したことが明らかとなった．

医療現場の様子　実習前は，このカテゴリに含まれるカード枚数は39枚と，全体の約42％であったが，実習後は，このカテゴリに含まれるカード枚数は44枚に増加し，全体の約50％となった．このことから，実習を経験することで，医療現場の様子に関するイメージの数が増加したことが明らかとなった．下位カテゴリをみると，医療行為のカード枚数の増加が目立ち，実習前は30枚で全体の約32％であったのが，実習後は37

表２　各カテゴリに含まれる実習前後のキーワード数およびカード枚数

	医療機関で働く職員像	医療現場の様子	世間一般での医療の捉え方	その他	total
キーワード（個）					
実習前	11（25.00）	17（38.64）	12（27.27）	4（9.09）	44（100）
実習後	9（18.00）	21（42.00）	17（34.00）	3（6.00）	51（100）
カード（枚）					
実習前	26（27.96）	39（41.94）	22（23.66）	6（6.45）	93（100）
実習後	11（12.64）	44（50.57）	25（28.74）	7（8.05）	87（100）

（　）の中は項目別の各値の全体比（％）

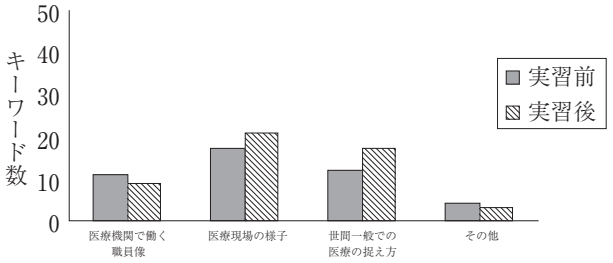

図１　各カテゴリに含まれる実習前後のキーワード数（個）

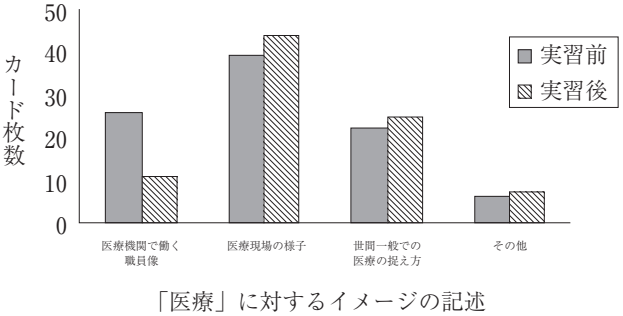

図２　各カテゴリに含まれる実習前後のカード枚数（枚）

表３　実習前と実習後における「医療現場の様子」と「世間一般での医療の捉え方」の下位カテゴリの内訳

	医療現場の様子		世間一般での医療の捉え方	
	医療行為	スタッフの様子	医療のポジティブな側面	医療のネガティブな側面
キーワード（個）				
実習前	11（25.00）	6（13.64）	9（20.45）	3（ 6.82）
実習後	14（28.00）	7（14.00）	8（16.00）	9（18.00）
カード（枚）				
実習前	30（32.26）	9（ 9.68）	14（15.05）	8（ 8.60）
実習後	37（42.53）	7（ 8.05）	11（12.64）	14（16.09）

（　）の中は項目別の各値の全体比（％）

枚と全体の約42％となった．このことから，実習を経験することで，医療行為に関するイメージが増加したことが明らかとなった（表３）．また，その内容をみると，実習後の調査結果には，実習前にはみられなかった「カウンセリング」や「リハビリ」などのコメディカル業務に関するキーワードがみられるようになった．このことから，実習を経験することでコメディカルスタッフの業務に関するイメージの種類が増加したことが明らかとなった．

世間一般での医療の捉え方　実習前は，このカテゴリに含まれるキーワード数は12個と，全体の約27％であったが，実習後は，このカテゴリに含まれるキーワード数は17個に増加し，全体の34％となった．このことから，実習を経験することで，世間一般での医療の捉え方に関するイメージの種類が増加したことが明らかとなった．下位カテゴリをみると，医療のネガティブな側面のキーワード数の増加が目立ち，実習前は３枚で全体の約７％であったのが，実習後には９枚と全体の約18％となった．このことから，実習を経験することで，医療のネガティブな側面に関するイメージの種類が増加したことが明らかとなった．

考　　察

本研究では，本学医療保育科の学生の「医療」という言葉に対するイメージ調査を通して，医療に関する知識が病棟保育実習ならびに病児保育実習の前後でどのように変化するのかを調べた．その結果，学生の「医療」という言葉に対するイメージは，実習を経験することで，全体的にその種類が豊富になったことが明らかとなった．このことから，実習を通して，学生の医療に関する知識が広がった可能性が示唆された．

また，実習前は医療機関で働く職員の就労状況や医療機関の職員になるための課程に関するイメージに偏りがちであったが，実習後はそのような傾向がみられないことが明らかとなった．このことから，実習前の学生は，医療というものを自分たちが実際に置かれている学生という立場から考えていたのが，実習を経験することで，実際に医療機関で働く者になった場合の立場からも医療というものを考えることができるようになった可能性が示唆された．また，実習後の調査では，医療現場の様子の中の特に医療行為に関するイメージの数が増えた．イメージの内容についても，実習後は，実習前には見られなかったコメディカルスタッフの業務内容に関するものにまで広がっていた．このことから，実習を経験することで，学生の医療行為に関する知識が幅広いものになったことが分かった．一方，実習を経験することで医療のネガティブな側面に関するイメージが増加することも明らかとなった．このことからは，学内の講義だけでは理解し得ない，実習を経験してこそ分かる入院患者の心境や実際の病棟内の雰囲気がある可能性が示唆された．

以上より，病棟保育実習ならびに病児保育実習は，学生にとって，医療機関でサービスを受ける側から提供する側へ視点を転換する機会になることが示唆された．また，実習を経験することで，学生の医療に関する知識は深まりをみせ，より臨床的なものへと変化することが明らかとなった．

３．研　究　２

目　　的

本学医療保育科の学生の「医療」という言葉に対するイメージと，医療保育士の養成を目的としない一般的な保育者養成校の学生の「医療」という言葉に対するイメージに違いがみられるか否かを調べた．

方　　法

調査参加者　本学医療保育科３年生のうち病児保育コースに所属する学生37名（女子学生35名，男子学生２名；平均年齢20.65歳）．医療保育士の養成を目的としない，岡山県内の公立の保育士養成短期大学および，広島県内の私立の保育士養成短期大学の最終学年生110名（男女の内訳不明；平均年齢不明）．本学でのアンケートの回収率は100％であり，有効回答率も100％であったので，分析対象者は37名であった．他の保育士養成校のアンケート回収率，有効回答率はともに91.82％であり，分析対象者は101名であった．

調査時期　本学医療保育科２期生が病棟保育実習ならびに病児保育実習を終えた後の，平成20年10月下旬に実施された．

調査手続き　研究１と同じであった．

アンケートの構成　研究１と同じであった．

分析方法　研究１と同じであった．

結　　果

研究１と同じ分析方法を用いて，研究１と同じ「医療機関で働く職員像」,「医療現場の様子」,「世間一般での医療の捉え方」,「その他」の４つのカテゴリを抽出した．なお，学生一人当たりのキーワード数は，本学医療保育科の学生（以下：学内）は1.37個，医療保育士の養成を目的としない他の保育者養成短期大学の学生（以下：学外）は0.99個，カード枚数は，学内2.35枚，学外2.55枚であった．各カテゴリに含まれたキーワード数ならびにカード枚数を表４に示す．

学内への調査結果，学外への調査結果ともに，各カテゴリに含まれるキーワード数およびカード枚数が均等ではないことを調べるためにx^2検定を行った．その結果，学内の調査結果も学外の調査結果も，キーワード数（学内：$x^2=18.55$，$p<.01$；学外：$x^2=101.82$，$p<.01$），カード枚数（学内：$x^2=38.56$，$p<.01$；学外：$x^2=41.57$，$p<.01$）ともに，検定値が各有意水準の値より大きかった．よって，いずれの調査結果においても，各カテゴリに含まれるキーワード数およびカード枚数が均等とはいえず，各カテゴリに含まれるキーワード数ならびにカード枚数に高低があることが明らかとなった（図３，４）．

全体的な結果として，学外に比べて学内のほうが，学生一人当たりの「医療」という言葉に対するイメージの種類（キーワード数）が多かったが，イメージの数（カード枚数）は学内に比べて学外のほうが多かった．カテゴリ別の結果を以下に記す．

医療機関で働く職員像　学内では，このカテゴリに含まれるカード枚数の全体比は約13％であったが，学外では，このカテゴリに含まれるカード枚数の全体比は約21％であった．このことから，学内よりも学外のほうが，「医療」という言葉から，医療機関で働く職員の就労状況や医療機関の職員になるための過程をイメージする傾向があることが明らかとなった．

医療現場の様子　学内では，このカテゴリに含まれるキーワード数の全体比は42％であったが，学外では，このカテゴリに含まれるキーワード数の全体比は27％であった．また，カード枚数の全体比は，学内では約51％であったが，学外では約35％であった．このことから，学内のほうが，学外に比べて現場の様子について種類，数ともに多く言及していることが明らかとなった．下位カテゴリをみると，医療行為のキーワード数の全体比は，学内では約28％であったが学外では16％，カード枚数の全体比は，学内では約43％であったが学外では約29％であった（表５）．このことから，学外に比べて学内のほうが，医療行為について種類，数ともに多く言及していることが明らかとなった．

世間一般での医療の捉え方　カテゴリ全体の学内外のキーワード数およびカード枚数でみると大きな変化はなかった．しかし，下位概念における医療のポジティブな側面のキーワードを学内と学外とで質的に比較すると，学外では「かっこいい」,「素晴らしい」,「重要」などの抽象的で表面的なものがみられたが，学内では「心身を健康にする」や「身体的・精神的にサポートする」など，専門性のある言葉で具体的な内容に言及しているものがみられた．このことから，学内では，学外よりもより具体的な医療の存在意義や効果に関するキーワードがみられることが明らかとなった．

表４　各カテゴリに含まれるキーワード数およびカード枚数

	医療機関で働く職員像	医療現場の様子	世間一般での医療の捉え方	その他	total	学生１人当たりの数
キーワード（個）						
学　内	9（18.00）	21（42.00）	17（34.00）	3（6.00）	51（100）	1.37
学　外	19（19.00）	27（27.00）	39（39.00）	15（15.00）	100（100）	0.99
カード（枚）						
学　外	11（12.64）	44（50.57）	25（28.74）	7（8.05）	87（100）	2.35
学　内	54（20.93）	91（35.27）	88（33.33）	27（10.47）	258（100）	2.55

（　）の中は項目別の各値の全体比（％）

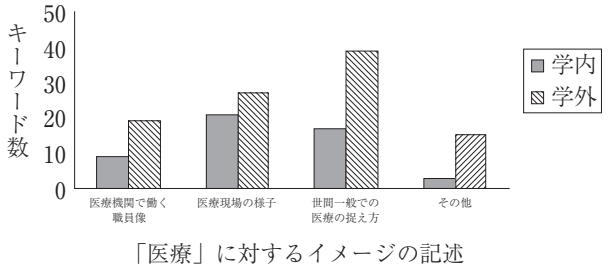

図３　各カテゴリに含まれる学内と学外のキーワード数（個）

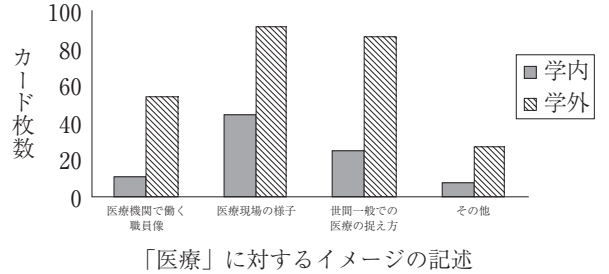

図４　各カテゴリに含まれる学内と学外のカード枚数（枚）

表5　学内と学外における「医療現場の様子」と「世間一般での医療の捉え方」の下位カテゴリの内訳

	医療現場の様子		世間一般での医療の捉え方	
	医療行為	スタッフの様子	医療のポジティブな側面	医療のネガティブな側面
キーワード（個）				
学　内	14（28.00）	7（14.00）	8（16.00）	9（18.00）
学　外	16（16.00）	11（11.00）	17（17.00）	22（22.00）
カード（枚）				
学　内	37（42.53）	7（8.05）	11（12.64）	14（16.09）
学　外	75（29.07）	16（6.20）	25（ 9.69）	61（23.64）

（　）の中は項目別の各値の全体比（%）

一方，医療のネガティブな側面のキーワードを学内と学外とで質的に比較すると，学外では，学内ではみられなかった「医療ミス」,「隠蔽」,「たらい回し」,「時間がかかる」など，マスコミ等から得た情報をもとにイメージ化をはかっていることが明らかとなった．

考　　察

本研究では，本学医療保育科の学生の「医療」という言葉に対するイメージと，医療保育士の養成を目的としない一般的な保育者養成校の学生の「医療」という言葉に対するイメージに違いがみられるか否かを調べた．その結果，学生の「医療」という言葉に対するイメージは，他の保育者養成校の学生よりも本学医療保育科の学生のほうが全体的にその種類が豊富であり，数も多いことが明らかとなった．このことから，本学医療保育科の学生は，学内指導による知識の獲得や実習による技術の実践を通して，他の保育者養成校の学生よりも医療に関する知識を確実に掴んだ可能性が示唆された．

また，他の保育者養成校の学生のイメージは，本学医療保育科の学生に比べて医療機関で働く職員の就労状況や医療機関の職員になるための過程に偏る傾向がみられたが，本学医療保育科の学生のイメージは，他の保育者養成校の学生に比べて実際の医療現場でみられる医療行為について種類，数ともに多く言及する傾向がみられることが明らかとなった．このことから，本学医療保育科の学生は，医療保育士の養成を目的としない一般的な保育者養成短期大学の学生よりも臨床的で専門的な医療の知識をもっていることが分かった．

さらに，この傾向は下位カテゴリの医療行為において特に顕著であり，本学医療保育科の学生は他の保育者養成校の学生よりも専門的な言葉を用いた表現が多く，具体的な内容のイメージ内容が多かった．一方，抽象的で表面的な内容やマスコミに影響されたと考えられる内容，医療機関利用者としての感想のような内容は，他の保育者養成校の学生のイメージにおいて多くみられることが分かった．このことから，本学医療保育科の学生は，他の保育者養成校の学生に比べて医療機関の中で働く者に近い立場や，医療機関で働く者になった場合の立場から医療について考えることができる可能性があることが示唆された．

以上より，本学医療保育科の学生は，学内での授業と学外実習を通して，病棟保育ならびに病児保育に携わる上で必要とされる専門的で具体的な医療の知識を，他の保育者養成校の最終学年の学生よりも多く獲得していることが明らかとなった．よって，本学医療保育科独自のカリキュラムは，医療保育士を養成するという目標を達成している可能性が示唆された．

4．総合考察

本研究の目的は，「医療」に対するイメージを通して本学医療保育科の学生への実習および学内指導の効果を検討することであった．本研究では，次の2つのことが明らかになった．1点目は，病棟保育実習ならびに病児保育実習を通して，学生の職業意識を高めることや学内での学習を深めることができることであり，2点目は，学内での授業および上記の実習を通して，学生は，他の保育者養成校の学生よりも多くの専門的で具体的な医療の知識を獲得することができることである．

病棟保育実習および病児保育実習は，学生が，学内で学んだ知識をより臨床的なものに体系化させるための重要なステップである．しかし，我々が知識を体系化させるためには，多くの素材が必要であることは言うまでもない．よって，学内指導においては，今後も幅広い医療の知識を提供していくことが必要であろう．また，職業意識を高めるとは，言い換えれば医療機関でサービスを提供する者としての意識をもつことである．実習によって医療保育士としての職業意識を高めることができるよう，学内の指導や講義であらかじめ医療保育についての情報を十分に提供しておくことが求められる．また，本学医療保育科の現在のカリキュラムを用いることで，一般的な保育者養成校の学生よりも専門的で豊富な医療の知識を提供することができる．しかし，現在のカリキュラムで提供できる医療の知識が，医療保育士として必要最低限の医療の基礎知識かどうかは明らかでない．よって，現状に満足するのではなく，より一層の講義内容および指導内容

の充実が求められる．最後に，本研究の手法には不備が多々ある．よって，今後は，より学術的で客観的な研究手法を用いて本学医療保育科の学生への実習および学内指導の効果を検討することを課題とする．

5．引用文献

1）帆足英一：医療保育の歴史と展望，「実践医療保育；いま―現場からの報告」帆足英一，長嶋正實 監修，東京：診断と治療社，pp．ⅱ―ⅷ，2007．

2）小児病棟実習委員会：平成21年度版小児病棟実習の手引，小児病棟実習委員会 編，第2版，岡山：p．3，2009．

3）大野尚子：小児病棟における病棟保育士の活動，小児看護24：387―392，2001．

4）大野尚子：病棟保育の成り立ちからチーム医療まで，「実践医療保育；いま―現場からの報告」帆足英一，長嶋正實 監修，東京：診断と治療社，pp．123―140，2007．

5）日沼千尋：保育士導入当時の思い出から今後のあり方を求めて，小児看護32：1019―1023，2009．